Report on the Villages in Northern China (1): Researches Conducted in September 2017 and September 2018 in Shanxi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Koizumi, Tatsuya, LU, Jun, XI, Jinhua, TANAKA, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00055454

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

華北内陸農村訪問調査報告(1)
―― 2017年9月・2018年9月山西省J鎮J村、L県N鎮G村 ――

Report on the Villages in Northern China (1): Researches Conducted in September 2017 and September 2018 in Shanxi Province

古泉達矢[1]・盧珺[2]・席金花[3]・田中比呂志[4]

KOIZUMI Tatsuya, LU Jun, XI Jinhua, TANAKA Hiroshi

1. 調査の概況

本稿の筆者である古泉達矢・盧珺・席金花および田中比呂志は、弁納才一を中心とする科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)[5]の一環として、2017年9月に山西省L県J鎮J村およびL県N鎮G村を訪問し、それぞれの村で聞き取り調査を行った。さらに古泉・席・田中の3名は、翌18年9月にも弁納才一を中心とする科学研究費補助金・基盤研究(B)[6]の一環としてこれらの村を再訪し、同様の調査を実施した。この報告は、これらの聞き取り調査の記録である[7]。なお記載されている年齢は、すべて調査当時のものである。

1　金沢大学　人間社会研究域　法学系　准教授

2　金沢大学大学院　人間社会環境研究科　博士課程

3　東京学芸大学大学院　教育学研究科　修士課程(2018年3月修了)

4　東京学芸大学　人文科学講座　歴史学分野　教授

5　科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)2013～2017年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者:弁納才一)。

6　科学研究費補助金・基盤研究(B)2018～2022年度「社会主義経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」(研究代表者:弁納才一)。

7　今回訪問した村ではすでに調査を複数回実施している。過去の調査記録については以下の文献を参照せよ。

2. 2017年調査

● 2017年9月20日（水）15:10-17:00

訪問者：古泉達矢・盧珺

通訳：盧珺

インフォーマント：CGY

場所：山西省L県J鎮J村　村民委員会の建物

○ 家族について

本人　62歳、1955年生まれ、未年

父親　CXL。1995年に76歳で死去。1950年から3年間、朝鮮戦争に参加した。戦争から戻ってから53年から66年にかけて、生産隊長を務めた。その後、CGYの祖父が地主だったために、文革において批判闘争の対象となった。その影響で、CGYが16歳（1971年）のときに父は下半身不随となる。それ以降、村から1年あたり365元を受け取るようになっ

菅野智博・盧珺・席金花・鄭翠梅・古泉達矢・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(7)付雲南省農村調査 ── 2015年9月河北省S県G鎮W村、山西省L県N鎮G村、2016年9月雲南省C自治州Z鎮D村、河北省R県W鎮W村、山西省L県J鎮Z村、L県N鎮G村 ──」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ』第69集（2018年）、61-72頁。

弁納才一「華北農村訪問調査報告(12) ── 2016年9月、雲南省・河北省・山西省 ──」『日本海域研究』第49号（2018年）、89-98頁。

内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(8)」『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』第2号（2017年）79-86頁。

祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(7)」『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』第1号（2016年）、55-66頁。

弁納才一「華北農村訪問調査報告(11) ── 2015年9月、河北省・山西省の農村 ──」『金沢大学経済論集』第36巻第2号（2016年3月）、161-185頁。

河野正・前野清太朗・古泉達矢・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(6) ── 2013年８月山西省L県G村、2014年8月山西省L県G村、H市T郷Y村、D県J郷Y村 ──」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ』第66集（2015年）、75-85頁。

た。自分がずっと幹部を務めることができたのは、このような父の事件をめぐる影響もあると思う。

母親　CYE。86歳。母方の祖母には子供が5人（男1人・女4人）おり、母親は2番目の娘だった。彼女は童養媳として、父方の祖父の家にやってきた。両親は1954年に結婚し、55年に自分が生まれた。

- 兄弟構成について

長男　自分

次男　CFY、40年ほど前に死去。

３男　CLY、1996年に炭鉱の事故で死去。この炭鉱は村の中にあった個人経営のものであり、賠償として3万から4万元ほどの金額を受け取った。当時、石炭の価格は1トンあたり20元ほどだった。

４男　CFY、52歳。

５男　CTY、50歳、未年。

長女　CFM、41～42歳、現在は本村の者と結婚。

弁納才一「華北農村訪問調査(9) ―― 2014年8月、山西省の農村 ―― 」『金沢大学経済論集』第35巻第1号（2015年1月）、149-168頁。

内山雅生・菅野智博・祁建民「中国内陸農村訪問調査(5)」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第15号（2015年）、1-15頁。

弁納才一「華北農村訪問調査報告(8) ―― 2013年8月、山西省の農村 ―― 」『金沢大学経済論集』第34巻第1号（2013年12月）、217-239頁。

内山雅生・河野正・前野清太朗・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(4)」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第14号（2013年）219-226頁。

弁納才一「華北農村訪問調査報告(7) ―― 2012年8月、山西省の農村 ―― 」『金沢大学経済論集』第33巻第1号（2012年12月）、289-307頁。

弁納才一「華北農村訪問調査報告(6) ―― 2011年8月、山西省の農村 ―― 」『金沢大学経済論集』第32巻第2号（2012年3月）、173-194頁。

弁納才一「華北農村訪問調査報告(5) ―― 2010年12月、山西省の農村 ―― 」『金沢大学経済論集』第32巻第1号（2011年12月）、157-175頁。

• 子供について

長女　CML、未年、38歳。本村から50キロほど離れたT県に嫁ぎ、現在はM小学で教師をしているが、本村にも家を持っている。夫のLJLはM郷信用社で働いている。

次女　CMQ、酉年、36歳。本村人に嫁ぐ。夫はHQG。本村でH姓の者は彼しかいない。現在は国営炭鉱で働いている。１ヶ月あたり3,000元ほどの給料を得ている。合同工（契約労働）なので、医療保険、養老保険などの社会保障がついてない。

長男　CMJ、戌年、35歳。元の村の隣村である耿家庄に住んで、子供の世話をしている。現在は無職。

• 家族生活について

現在、CGYは息子と彼が所有する土地10畝から、1年あたり1,996元の賃借料を得ている（村の土地の賃借については後述）。元の村から現在の村へ移動する際に、それぞれの家族が1平米あたり1,200元の価格で103㎡の家を購入した（家の建設費用については後述）。現在は自分と子供がこの集団住宅団地にそれぞれ103㎡の家を1軒ずつ、あわせて4軒所有している。

○ 本人の経歴について

・1977年、初級中学（L学校）を卒業。
・1978年、L林業国営苗甫（林業学校）で学ぶ
・1980年、J村民兵連長。この時期には、種・肥料・農具・糧食（ジャガイモ・さつまいも・トウモロコシ・穀類・豆類）の保管員を務めた。当時の主食はおもにトウモロコシだった。
・1986年、J村支部委員会副書記
・1996年、J村第4・5・6・7届村民委員会主任
・2008年12月、J村第8・9届党支部副書記

・2014年12月27日、J村第10届村民委員会主任
・林業を学んだ経験があるので、2008年以降村が現在の集中住宅団地へ移ってから、団地の中の植物の管理を務めている。また、団地への給水や暖房の供給についても兼業として担当している。これらは村幹部としての仕事ではない。
・現在、村の幹部としての給料を１ヶ月あたり800元、それ以外の兼業から１ヶ月あたり1,500元ほどの収入を得ている。

○ 村の近況について

工業によって農業を支えることを目的とした、国家の「一鉱一流域」という政策によって、元の村から現在の場所へ2008年に移動した。現在、山地は1畝あたり100元、溝地は1畝あたり200元で貸し出している。溝地とは平らで川の近くにある土地のことで、山地より水利条件が良い。

村では1996年からクルミの栽培を始めた。当初は800畝ほどの土地に植林した。2008年に村を移る際に、国営炭鉱へ売却した。木々の生育状況がそれぞれ異なるため、販売価格も1本あたり20元・50元・80元と一様ではなかった。

新しい村の建設費用は、元の村の土地を売却した相手である炭鉱が支出した。今の村の若い男子はその炭鉱で働いている。この炭鉱で働くことのできる年齢は18歳から45歳までに制限されており、40人以上の者が就労している。契約労働なので、保険などはついていない。ほかには、外で清掃員や工程隊（建設工事現場での仕事）、環衛工[8]として樹木の栽培などの仕事についている若い男性もいる。女性は子供の世話をしている。子供は本村から1キロほど離れた隣村のJ村にある小学校（J小学）か、あるいは鎮の小学校であるJ小学へ通っている。

8　環境・衛生の保全を担う仕事であろうか。

○ 村の移設について

村の移設は、「移民搬遷」というプロジェクトの一環として行われた。移転に際して、1人あたり県から1,300元が支給された。さらに国から1人あたり5,000元が、地質的災害に対する補償金という名目で支給された。このほか、1人あたり3万元を村が負担した。村を移設する際には、補償として炭鉱から1人あたり30㎡の住宅面積を無料でもらえた。超過部分は1,200元/㎡の価格で各自が自由に購入できた。もしそれ以上の広さを求める場合は、各自が追加分を負担した。建築工事は鎮が請け負った。なお移転に際してCGYは村の果樹の売却を担当し、クルミ・リンゴなどの売却益だけで15,000元を得た。

いまの村民はおよそ600人ほどである。村では全く農業は行われていない。現在、村では幹部が代表を務め、60代から70代までの20～30人ぐらいの老人によって構成される「打零工」という組織が、以前村が所有していたクルミの木を管理している。この仕事の1人あたりの賃金は1日あたり80元で、本村が支出しているが、その費用は「クルミの維持・管理」という名目で県から得ている。一方、クルミの販売から得た収入は木の所有者である炭鉱のものとなる。現在、炭鉱の収益はあまり良くないため、このような措置をとることで、村が炭鉱へ増益の手助けをしている。クルミの木は炭鉱が所有しているが、それらが植樹されている土地は未だに本村人が所有しているため、本村人もこれらの木を管理しようとする意識が高い。

今年、CGYが担当者となり、本村から国に対して低産量改良プロジェクトを申請したところ、県委政府・鎮党委政府の普及推進項目として採用された。この結果、100畝ほどの土地に新しい種類のクルミの木を植樹した。もし収益が出れば、これを炭鉱へ見せて資金を提供させることで、事業を拡大する予定である。なお、本県で同項目に採用された事例は、本村の事業に加えてJ村の万苗垣（200～300畝）の事業だけである。

● 2017年9月22日(金) 09:50-10:50

訪問者：古泉達矢・盧珺

通訳：盧珺

インフォーマント：LYW

場所：山西省L県N鎮G村　G村級組織活動場所

○ 家族について

本人　65歳、1952年生まれ、辰年。

父親　LFH、1916年生まれ、辰年。2002年に86歳で死去。中農だったが、土地の所有面積はわからない。畑ではトウモロコシ・小麦・豆類・トマト・ナス・トウガラシを栽培していた。

母親　ZCL、1920年生まれ、申年。1990年に70歳で死去。母の祖父の代に山西省汾陽市から本村へ移り住んできた。

妻　名前は不明（言いたくないとのこと)、62歳（未年)。本村から10キロほど離れたW郷出身。同村の小学校（W小学）の教師を務めていたが、友人の紹介で1978年に結婚した。1990年に職場を本村の小学校へ移すまで、妻と別の場所に住んでおり、週末だけ会う生活をしていた。子供は妻と一緒に住んで、妻の働く学校へ通っていた。1993年から94年にかけて、北朝鮮から教育関係の訪問団が訪れた際に、彼らに教えたことがあった。また同じ時期に北京師範大学の教育関係者が来て、妻の授業を見学していったこともある。

長女　名前は不明（言いたくないとのこと)、37歳、未年。北京の中国科学院で数学の博士号を取得し、現在もなお北京に住んで、同学院で働いている。結婚して子供もいる。

長男　名前は不明（言いたくないとのこと)、35歳、酉年。北京の中国科学院でコンピューター関係の博士号を取得し、やはり現在もなお同学院で働いている。結婚して子供もいる。

○ 本人の経歴について

1960年にG小学へ入学。複式クラスだったため、1年生から4年生までが同じ教室で学んでいた。1967年に本村から5キロほど離れたD村に所在するD中学へ入学し、2年間学んだ。学校に住み込んで学んでおり、週に一度ほど食料を得るために家へ戻っていた。学校では、家で得た食料を学校が調理したものを食べて生活していた。

中学卒業後、D高中へ進学し、1972年に卒業した。文革の影響で1年ほど学校が停学となったため、通常よりも卒業するのが遅くなった。高中在学中も学校に住んでいたが、停学中は家に戻って農業を手伝っていた。高中では、国から１ヶ月あたり15キロのトウモロコシ・小麦を支給された。食事は学校の食堂で食べていた。中学・高中ともに学費は無料だった。

卒業後は村の生産隊で1年間働いた。1973年から74年にかけては、本村の小学校で臨時教師を務め、１ヶ月あたり27元の給与を得ていた。その後、78年までN鎮の人民公社（N公社）で団書記を務めた。79年から84年までの間は、N鎮の水利ステーションで水利の仕事をしていた。その間、81年から82年にかけて半年間ほど、県の水利局によって他の水利に従事する者と共に農業関係の学校へ派遣され、そこで学んだ。水利ステーションでは、飲料水や灌漑用水の管理、水土保持（災害防止のための水分と土壌の保全）などを行っていた。その後、鎮政府で紀検（紀律検査）書記、党委副書記、人大（地方レベルの人民代表大会）主席を務め、60歳で退職した。

退職後は北京の息子の元に住んでおり、暑い時期だけ山西省の実家に戻って生活している。

○ 現在の仕事について

現在は村の中にある堤防の建設や修理（修壩）に携わっている。LYWが設計した「G村級組織活動場所」は2016年8月に完成した。現在、本村は「建設美麗郷村」（美しい村を建設するための整備事業）という国家プロジェク

トに申請中である。もし成功すれば、国家から約数十万元の補助金をもらえるそうだ。

3. 2018年調査

● 訪問日時：2018年9月16日(日) 09:00-10:50

訪問者：古泉達矢・田中比呂志・席金花

通訳：席金花

インフォーマント：LZW

場所：山西省L県J鎮J村　村民委員会の建物

○ 家族・親族について

本人　69歳、1949年生まれ、丑年。

父親　LSY、1994年に77歳で死去。抗日戦争時には八路軍の民兵として遊撃隊に所属していた。その後、村で幹部を担当した。父からは、この村にも日本軍がやってきて宿泊したほか、糧食や金を集めようとしたと聞いた。日本人が雇った中国人は二鬼子と呼ばれており、時おり人を殺したりした。父は共産党員で、国共内戦後にはJ鎮の人民公社（J人民公社）で幹部を経験した。そもそも土地を持っていなかったが、土地改革以降、十数畝の土地を得た。当時の家族は4～5人だった。

母親　XAL、Z村出身、1986年に60歳で死亡。

祖父　LHL（Hという字が排行）。

祖父の長男　LSC（息子2名、娘4名）

同　　次男　LSY（インフォーマントの父親）

同　　三男　LSL（息子1名）

妻　　CQL、本村出身、67歳、1951年生まれ、卯年。1967年に見合い結婚をした。小学卒業。集団化の時代には、ほかの村民と共に農業や育児に

従事した。

• 兄弟構成について

長女　LJX、73歳、酉年。共産党員、初級中学卒業。もともと介休で職についていたが、夫が仕事の分配の都合で北京航空航天大学にて党務についたため、夫と共に同大学で会計として働くようになった。現在はリタイアしており、北京に在住。

次男　自分

三男　LZQ、67歳。L鉄場（製鉄工場）で労働者として働いていた。現在は退職している。

四男　LZY、2012年に59歳で病気のため死去。L政法委で幹部を務めていた。

• 子供について

長女　LLP、49歳、酉年。

次女　LXP、46歳、子年。

長男　LYH、44歳、1974年生まれ、寅年。

次男　LJH、42歳、1976年生まれ、辰年。

○ L姓について

本村では菜という姓がもっとも多く、人口の約80パーセントを占める。その他には馬、L、張、韓という苗字が存在する。L姓は彼の一族しかいない。おおよそ100年ほど前、祖父の代にG村から本村にやってきたが、理由はよく分からない。この地方では、親族が死去すると名前を記入する「神単」[9]という系図がある。本村のL姓の神単については、現在誰が持っているのか分からない。

9　一般的には「神子」とも呼ばれる。

○ 本人の経歴について

・8歳で小学入学。4年間学んだ後、さらにJ鎮初級中学で3年間学び、1968年卒業。
・初級中学を卒業後、村へ戻って共青団の団支部書記を務めた。その間、1970年に入党した。
・1972年から76年にかけて村内からの選出を受けて、村書記を務めた。
・1976年から80年にかけて、J鎮人民公社の組織である水利隊の指導員を務めた。水利隊は耕作地の開墾や造成、ある土地で栽培する作物の選択やダムを建設したりすることが主な仕事だった。
・1980年から2005年にかけてはL建材工場で労働者として働いた。この工場では、レンガや瓦を製造していた。
・2005年にリタイアし、村に戻った。現在は農業のほか、村の小区の物業（マンションの水利・衛生の管理など）を行っている。

○ 文化大革命時の村の様子について

文革時には共産党員が「兵団」および「総站」という二つの派閥に分かれて闘争していた。これらの組織は共青団とは関係がなかった。両者の抗争は1971～72年ごろに終息した。

○ 人民公社時代の様子について

人民公社時代には、この村ではJ鎮人民公社のもと、500名ほどの人数が2つの小隊（生産隊）を組織していた。通常、ひとつの小隊には2人の隊長がいた。LZWが村の書記を務めていた頃の第1小隊の隊長はHCWという人物だった。元々もう1名いたが、高齢を理由として隊長職から退いた。第2小隊の隊長はCRF、CSJという人物だった。村は1,300畝ほどの土地を有していたが、そのうち耕地面積がどの程度を占めていたのかは分からない。

小隊の隊長は全員を連れて仕事をする際に、例えばどのような作物を栽培

するか、といった仕事の内容を決定する権利を持っていた。当時の夏の仕事の様子は以下のようなものだった。まず6時から9時頃まで働き、その後朝食をとる。続いて10時半から14時頃にかけて働き、昼食をとる。その後、再び16時頃から18時ないし19時頃まで働いた。秋になると、仕事のパターンが変化した。まず7時から9時ないし10時頃まで働き、朝食をとる。その後、再び11時から16時頃まで働いた。小麦・トウモロコシ・アワなどを栽培していた。

○ 村の産業について

Lにある建材工場は、L県が作った国営工場である。村では、クルミや薬剤の材料となる植物を植えている。現在では、L煤砿という会社が村の土地を借りており、山地であれば年間1畝あたり140元、溝地であれば年間1畝あたり200元の賃借料を支払っている。

○ 村での墓参について

李家の墓は村内の山の方にある。この村では男性が清明節と7月15日に墓参する。7月15日の墓参は行く時もあれば、行かない時もある。紙銭、酒、食べ物などのほか、紙で作った旗を持っていき、墓に供える。男性しか墓参しないため、墓に旗が立っていないと、すなわち後継となる子供がいない、という意味になる。これらの旗は墓参する者が自分で作るが、特に何かを書き込んだりはしない。L氏の墓地は概ね20畝程度だ。この村では土葬が一般的である。

● 2018年9月16日（日）15:10-17:00

訪問者：古泉達矢・田中比呂志・席金花

通訳：席金花

インフォーマント：CCQ（44歳、1974年生まれ、寅年、共産党J村支部書記）

場所：山西省L県J鎮J村　村民委員会の建物

○ 共産党J村支部について

村支部の仕事は基本的に党の建設に関するものである。これらは、政治面・経済面の二つの方面に分かれている。政治面では、社会問題を村民に伝える仕事が主である。経済面では、村で栽培しているクルミや薬草・薬材などの生産に関する仕事が中心である。党の建設に伴う仕事として、「紅白礼義会」(慶事・弔事の取り扱い)、「物業管理」(不動産の管理)、「婦女連合会」(女性による出産や子供の生育、女性の合法的な権利の擁護、文化・娯楽活動)などがある。

共産党村支部は、書記1名、委員2名で構成されている。村支部の幹部は党員の中から党員による選挙を通じて選ばれる。被選挙権についての規定はないが、通常は健康状態の良好な者であることが条件となる。共産党村支部は鎮支部と直接関係があり、鎮支部からの指示があるとそれを村民に伝える。現在は「微信(WeChat)」のグループ機能を用いて、会議の日時・内容・場所などの指示を伝えてくる。ほとんどの会議は鎮で開かれるが、内容によっては県城で行われることもある。全てのことを鎮支部からの指示通りに行うことができる訳ではない。もし定められた期間内に対処できない問題である場合は、しばらく置いておいてその後改めて解決する。

本村には共産党の党員代表が5名おり、合計26名の党員が存在する。共産党の村支部は村の党務に関する事柄を決めるほか、党員代表を通じて党員を指導する立場にある。さらに同村支部は村の自治組織である村民委員会を指導する役割も負っている。党の村支部から党員へ連絡する際には、全ての党員が1ヶ所に集合する。法律関係の案件といった大きな問題については党員全員で合議するが、小さな問題については党員代表だけで話し合って対応を決める。党支部は少なくとも月に一度は会議を開くほか、少なくとも3ヶ月に一度は全体党員会を開く。

党費は農民の場合は1ヶ月あたり0.5元、労働者(工人)の場合は給料により異なる。書記の場合は1ヶ月あたり十数元である。

党員は党章の学習なども行う。現在は習近平を核心とする「掃黒除悪　弘揚正気（悪を取り除き、公明盛大な気概を広めよう）」という重要な策略をいかに実施するかを学んでいる。

党支部の賃金は、書記が1年あたり3万元の基本給のほか、成績に応じて出来高払いの報酬がある。これは良ければ基本給の半分くらいだが、悪い場合はない。委員は村からの支払いとなるので、村によって金額が異なる。おおよそ1日あたり80から100元程度で、その日の労働時間や仕事内容を目安に決められる。基本給は半年に一度支払われ、少なくとも1年あたり6,000元ほどになる。

村書記の任期は現在3年だが、5年に延長される可能性もある。連任は可能であり、現在CCQは3期目を務めている。

○ 村民委員会について

村民委員会の構成は、村長1名、副村長1名、委員1名となっており、現在では委員の1名が女性である。村民委員会は村民全員から選挙で選ばれる。18歳以上の村民が選挙権を有する。このように現在、村民委員会は3名によって構成されているが、そのうち1名は必ず女性が含まれることになっている。

現在、本村には700名の村民が住んでおり、およそ15戸あたり1名、合計15名の村民代表がいる。村民委員会は村民代表を指導する立場にある。一方、村民代表は村民へ村民委員会の決定を伝達すると共に、村民の意向を村民委員会へ連絡する役割を果たしている。もし村の内部で問題が生じた場合、小さなことであれば村民代表のみで対応することができるが、大きな問題の場合は村民委員会および党の村支部と話し合って決める。

村民委員の給与は、村長の場合は県から支払われ、金額は村の書記と同額である。それ以外の委員については村から支払われ、労働時間に応じた出来高払いである。なお村は県からの補助金を受けているが、これは村の公益事

業に使われるほか、村民委員への給与の支払いに充てられることもある。

村の会計は村の党支部と村民委員会が選ぶ。選挙を通じて選ばれるのではない。彼は党支部の構成員や村民委員の仕事を記録するだけである。

党支部の構成員や村民委員の成績の評価は「考核表」への記載に依拠して鎮政府が行う。「考核表」は鎮政府が管理しており、どの期間、どれくらいの仕事をしたかが記録されている。その評価に従い、年末に出来高払いの報酬が銀行口座へ振り込まれる。

現在の村長はCGYである。村長の任期は3年で、彼の場合は4期連任した後で2期休み、その後再度就任し、現在2期連続して務めている。

最後の書記・村長の選挙は2017年に開かれた。毎回概ね10月頃に実施され、それぞれの任期は選挙直後から始まる。

● 2018年9月18日(火) 09:05-11:00

訪問者：古泉達矢・田中比呂志・席金花

通訳：席金花

インフォーマント：LFS、65歳、1953年生まれ、巳年、中国共産党員

場所：山西省N鎮G村　G村級組織活動場所

○ 文化大革命をめぐる経験について

文革が始まった1966年当時、インフォーマントは小学6年生だった。小学1年生から4年生までは村内の小学へ通い、5・6年次には本村から7里ほど離れたD村にあるD完全小学へ通った。当時は学校に宿泊しており、週に一度実家へ戻る生活を送っていた。その後、1967年から70年にかけてD村の初級中学へ、さらに71年から72年にかけて、やはりD村の高級中学へ通った。

文革当時、F砿区では放火されて死ぬ人が出た。またD村内でも文革の影響で人が殺されることがあった。学生はみな紅衛兵となった。当時の状況は「停課鬧革命」(授業を止めて革命を盛んにする)という言葉で表される。「大

鳴」「大放」「大弁論」「大字報」という４大スローガンが存在し、学生が教師を殴ることもあった。教師もまたいくつかの派閥に分かれていた。主たるものは「虎山行」および「紅衛兵」と呼ばれるものだった。これらの他にも多くの派閥が存在した。

○ 本人の仕事について

• 村級監察信息員について

今年の7月から村級監察信息員を担当している。今年村民委員会に新たに設置された役職で、党員でないと務めることができない。任期はない。村民委員会と党支部が合議して人選をおこなう。担当者が決まったら鎮政府にその内容を伝え、その許可を得て就任する。

従来から、村の党支部には紀律検察委員会が存在し、党ないし党員の活動を管理していた。これに対して村級監察信息員は、村で生じたあらゆる汚職を監督する立場にあり、党支部・村書記・村民委員会・村長・村の会計による仕事を主な対象とする。

もし村内で問題が生じたら、村書記・村長・会計と相談し、鎮政府の総合治理弁公室へその内容を必ず報告しなければならない。村級監察信息員には問題を解決する権限は与えられていない。報告を受けた綜合治理弁公室は、村へ当該問題の解決方法を指示する。もし鎮政府が当該案件は鎮レベルでは解決できないと判断したら、これらの案件は県レベルの中国検察院・法院へ送られる。

村級監察信息員が扱うのは民事事件である。刑事事件については誰でも公安へ報告することができる。刑事事件はまず公安が扱い、その後検察院や法院が処理する。

本村内には「掃黒除悪挙報箱」が設置されていて、毎月5日・15日・25日にこれを開けて、村民からの報告を確認する。何かあれば村書記・会計と相談の上、鎮に報告する。

村民委員会内部には調解委員会が設置されており、インフォーマントが中心となって問題の解決をはかる。小さい問題であれば調解委員会が解決できる。本村と他村の間で問題が生じた場合には、村の指導者同士で話し合う。もしそれができない場合には、上級機関へ報告する。

- 教員生活から現在に至るまでの仕事について

2013年までは村内の小学・中学で教員をしていた。政治・国語・歴史・地理を教えたほか、学校の会計を担当した。また6年間ほど小学校長を務めたこともある。現在村にあるのは小学校だけだ。

2013年に小学校を退職すると、G村運達煤化廠およびH矸業公司F培訓中心で財務（会計）を務めていた。かつて、本村には石炭を洗煤する工場（煤化廠）が4つ存在した。このうち本村が運営するG村運達煤化廠は、石炭を洗煤・加工して別の場所へ運ぶ業務を行っていた。残りの3つの煤化廠は村外の者が所有していた。往時、村の近くには複数の炭鉱が存在したが、中国政府が規模の小さい炭鉱からの採掘を禁止したため、これらの炭鉱は次々と閉鎖されていった。こうした状況を受けて村は2000年にG村運達煤化廠を村外の者へ売却し、経営から手を引いた。現在、村の中に炭鉱はないが、この村に居住しながら他村の炭鉱で働いている人々は存在する。一方、村外者が所有する3つの煤化廠は現在も運営を続けており、山西省・陝西省から採掘された鉱石を洗煤している。これらの煤化廠では本村民も働いている。H矸業公司F培訓中心は炭鉱労働者に対して安全な採掘法を訓練する会社だったが、2004年に閉鎖された。このように、G村運達煤化廠およびH矸業公司F培訓中心はいずれもインフォーマントが退職した時点で既に閉鎖されていたが、未だに一部会計の処理などが残務として残されていた。インフォーマントはこれらの業務を担当した。

現在、鎮以上の政府幹部を担当していた人々の天下りは厳しく規制されている。もしこの規定に違反すると、企業にも罰則が科される。

かつてG村運達煤化廠は村へ食料などの配給を行っていた。この配給は、村が同煤化廠を売却した際に結んだ土地の貸与をめぐる契約に基づいて、現在も続けられている。煤化廠の跡地は2000年から16年にかけて荒地となっていたが、16年末から整備され、2017年3月からガソリンスタンドの経営が始められた。村民の中には、現在このガソリンスタンドを運営する会社で働いている者もいる。